

説教 『 エッサイの根より一つの芽が 』

イザヤ書 11章1節～5節

小河信一 牧師

旧約から新約へと、一つの使信が受け渡され、そこにさらなる深化が見られる事例として、「エッサイの根」を取り上げます。長期にわたる御言葉の継承の中で、キリスト預言とその成就として、すなわち、福音として、この「エッサイの根」という使信は際立つものと成りました。讚美歌96番「エッサイの根より」の歌詞の題材となった、根または株→芽→若枝→主の霊がとどまるお方へという展開をたどってみましょう。

旧新約聖書において、「エッサイの根」または「エッサイの株」という句は全部3回出て来ます。

イザヤ書 11:1-2——

- 1 エッサイの株^{かぶ}からひとつの芽^もが萌えいで
その根^{かぶ}からひとつの若枝^{わかえだ}が育ち
- 2 その（彼の）上に主の霊がとどまる。

知恵と識別の霊

思慮と勇気の霊

主を知り、畏れ敬う霊。

イザヤ書 11:10——

その日が来れば

エッサイの根は

すべての民の旗印^{はたじろし}として立てられ

国々はそれを求めて集う。

そのとどまる場所は栄光に輝く。

ローマの信徒への手紙 15:12——

また、イザヤはこう言っています。

「エッサイの根から芽が現れ、

異邦人を治めるために立ち上がる。

異邦人は彼に望みをかける。」

この3箇所テキストを巡って、神からの使信を聴き取りましょう。実は、この3箇所の内容は微妙に異なっています。そこで、私たちは「エッサイの根・株」という主題が御言葉の伝達のうちに深まり豊かになっていることに気がつく必要があります。

それが、御子、主イエス・キリストをエッサイの株から生い出でられた若枝としてお迎えすることにつながっていきます。奇しくも、救い主は赤子として、エッサイの住んでいたベツレヘムでお生まれになりました。

さて、ここで一つ質問ですが、「エッサイはユダヤ人ですか」？ ここでは、エッサイの血筋について尋ねています。回答は、次のルツ記の両節を読めば分かります。

ルツ記 4:13——

ボアズはこうして（モアブの女）ルツをめとったので、ルツはボアズの妻となり、ボアズは彼女のところに入った。主が身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ。

ルツ記 4:17——

近所の婦人たちは、ナオミに子供が生まれたと言って、その子に名前を付け、その子をオベドと名付けた。オベドはエッサイの父、エッサイはダビデの父である。

すなわち、エッサイの祖母はモアブ人ルツであり、エッサイの中には四分の一（＝クォーター）、異邦人の血が混じっていました。

確かにモアブ人の祖先はユダヤ民族と姻戚関係を持ちますが（創世記 19:36-37）、彼らがバアルの神々を崇拝していた（士師記 10:6）という観点から、ユダヤ人にとってモアブ人は異教徒であり外国人（列王記上 11:1、歴代誌上 18:11）でした。パウロが、ユダヤ人と異邦人の和解を巡る文脈の中で、「エッサイの根」を引用した（ローマ 15:12）一つの理由は、パウロがユダヤ人エッサイの持つ異邦人性に着眼したからではないでしょうか。異邦人を想起させる「エッサイの根」の比喩は、異邦人の救いを論じたローマの信徒への手紙 11 章（:17-24）のオリーブの根・枝・切り取り・元の木・接ぎ木などの比喩とも共振しています。

そのような視点から、旧新約聖書、3箇所「エッサイの根・株」を見直してみましょう。すると、まさに比喩の通りに、最初には芽生えていなかった「ユダヤ人・異邦人」の混合株が繁茂して、「すべての民」・「国々（＝異邦人！）」（イザヤ書 11:10）、そして「異邦人」（ローマ 15:12）というように枝葉を伸ばしていることが分かります。異邦人にさかのぼるルーツ（根）を持つエッサイという人物は、福音がユダヤ人から異邦人へと、私たち日本人を含めて全世界へと宣べ伝えられていく象徴であります。その意味で、エッサイという名は、すべての人に神の救いが知らされることを表示しています。

イザヤ書 11:1-2——

- 1 エッサイの株^{かぶ}からひとつの芽^もが萌えいで
その根^ねからひとつの若枝^{わかえだ}が育ち
- 2 その（彼の）上に主の霊^{たま}がとどまる。
知恵と識別の霊
思慮と勇氣の霊
主を知り、畏れ敬う霊。

さて、この1番目の「エッサイの根・株」テキストは、イエス・キリストの預言と呼べるものです。断ち切られたような木の切り株から、驚くべきかたちで御力を持った、人間を救い出すメシアが若枝のように誕生するという預言です。

詳しく言うと、類義語「株^{かぶ}」（ゲーザ）と「根」（ショーレシュ）が並んでいます。特に「株^{かぶ}」からは、木が枯れるか腐るかして、あるいは斧^{おの}で叩き切られるかして、切り株だけが残っているという悲惨さが汲み取られます。いずれにしても、「株」や「根」が表している、木が陥った成長しにくい状態は、神の恵みの巡りにおいて何か思わしくないことが生じたことを示しています。

それでは、なぜ、神から選ばれたユダヤ民族の系譜が、断ち切られ、その株は地中に埋^{うず}もれてしまったような絶望状態に陥ったのでしょうか？

それは端的には、人間の罪によって、です。神の祝福を受け継ぐべき先祖やその子孫が罪に引かれていってしまった、つまり、「あらゆる悪に向かう傾向」にあらがい得なかったということです（ハイデルベルク信仰問答 問い8参照）。エッサイの子、ダビデをはじめとする指導者によって、ひとたびはイスラエル・ユダに王国の時代、礼拝共同体^{はぐく}の育まれる時代が到来しましたが、やがてユダ王国は崩壊しバビロン捕囚のために、民族は散り散りになりました。それはまさにユダヤ民族の「切り株」の時代であり、「残りの者」（イザヤ書 11:11,16）の回復に希望をつなぐこととなりました。

人間の側から見ると、罪^{きわ}極まって闇に覆われ、ただ「切り株」が残っただけか、という状態の中で、にもかかわらず、神はメシア預言を告げられたのです。

イザヤ書 11:2 には、「霊」（4回）の満たしが強調されています。その冒頭には「その（彼の）上に主の霊^{たま}がとどまる」とあり、霊の注ぎは誰に関わることが明示されています。

私たちの間に肉となって来られた御子イエスは、父なる神の御心に添って、「知恵と識別」また「思慮と勇氣」を用い、霊的に仕えるお方だということが証されています。

ヨハネ福音書 1:33 洗礼者ヨハネがイエス・キリストのことを証して――

「わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“^い霊”が降^{くだ}って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。」

並行するマルコ福音書 1:10 には、「天が裂けて“^い霊”が鳩のように御自分に降って」来たと記されています。ここには、父なる神と子なるイエスとの交わりの中に聖霊が働いていた様子がかがわれます。何よりも、父と御子とが協同して人間を罪のどん底から助け出そうとされた、その時、聖霊なる神の力も存分に発揮されたということです。

私たち、信仰者は、父・子・御霊の交わりにあずかっていますから、私たちの上にも「知恵と識別」また「思慮と勇氣」が靈的に働いています。

イザヤ書 11:2 「その上に主の^い霊がとどまる」は、「憩^いっている / 休んでいる」という意味（ノアという名もこの意味に由来します）で、聖霊が天使のように降り、人間の肩で羽を休めているという光景が目には浮かんできます。私が頑張^いって聖霊の導きにあずかろうとするのではなく、^い私のもとに聖霊がとどまり、安らいでいるというのが、メシア預言に示された靈的生活なのでしょう。

以上のように、1 番目の「エッサイの根・株」テキストは、イエス・キリストに焦点が合わされています。次に、2 番目の「エッサイの根・株」テキストを読みましょう。

イザヤ書 11:10——

その日が来れば

エッサイの根は

すべての民の^{はたじろし}旗印として立てられ

国々はそれを求めて集う。

そのとどまる場所は栄光に輝く。

これもまた、イエス・キリストを指し示すメシア預言です。そして、新たな用語「すべての民」と「国々」（=異邦人たち）と共に、メシアなるキリストと人間・礼拝者との関係が描かれています。

先に、1 番目のテキストを説き明かした際には、木が根元から断ち切られたような、人間の罪による悲惨さを汲み取ることができると言いました。問題は、神の峻厳な裁きをこうむった人間はほんとうに神から見捨てられたのか、ということです。

イザヤ書 11:10 に則して言えば、イエス・キリストが「旗印」となり、ユダの民・諸部族と異邦の民とがその主のもとに集って来ます。父なる神は、全世界から巡礼

して来た人々に、救い主キリストを通じて、恵みをほどこされます。それに対する人間の為すべき応答は、キリストを拝むこと、礼拝にほかなりません。

このように、礼拝においてこそ、神と人との愛に根づいた、正しい関係があらわされます。さ迷いやすい私たちは、主日ごとに、キリストの御前に出で、神との交わりを回復するのです。

1番目から2番目へ、2番目から3番目へという展開を踏まえて、3番目「エッセイの根・株」テキストを読んでみましょう。

ローマの信徒への手紙 15:12——

また、イザヤはこう言っています。

「エッセイの根から芽が現れ、

異邦人を治めるために立ち上がる。

異邦人は彼に望みをかける。」

「イザヤはこう言っています」とは言うものの、最後の詩行「異邦人は彼に望みをかける」は、旧約の「エッセイの根・株」テキストには見当たりません。ところが、新約の「エッセイの根・株」テキストには、神の恵みに対して、人間の側から応答が起こることが明記されています。地の果てに住む人、または罪の極みの中に動けない人、彼らはひたすらメシアに（彼に）、つまり、イエスがキリストであることに希望を抱くであろう、というのです。信仰者がキリストに望みをおくことが重大事であるがゆえに、パウロは次節の祝福において「希望」を二度繰り返して祈っています。

2番目の「エッセイの根・株」テキストでは、メシアが人々を招き集められた礼拝、栄光に輝く霊的な交わりが描かれていました。そして、3番目の「エッセイの根・株」テキストでは、信仰者がエッセイの根にすべてをかける、将来を託すという姿勢が明らかにされました。なぜ、私たちが抱くメシアへの「希望」がまことの希望であるのか、それは、イエス・キリストが十字架と復活の御業を成し遂げられて、希望の誤りなきこととその確かさを私たちに示してくださったからです。

ここで、イザヤ書 11:1-5 の中で、「エッセイの根・株」テキスト以外に注目すべき箇所を挙げましょう。

イザヤ書 11:3——

彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。

目に見えるところによって裁きを行わず

耳にするとところによって弁護することはない。

皆さんの中に、他者からうわさやうわべによって偏^{かたよ}り見られて、苦しんでいる人はいませんか。世の中には、「目に見えるところ」や「耳にするところ」、すなわち、偏見や先入観のために、しいたげられている人・見下されている人・誤解されている人々があります。そのような人々にとって、イエス・キリストが世のように「裁きを行わず」というのは、福音・喜びの知らせです。

厳密に言えば、主イエス・キリストは、すべての信仰者・罪人の「目に見えるところ」や「耳にするところ」を把握されています。主は私たちの心の中まで見抜き、私たちの言葉に耳を傾けられています。しかし主は、世のよこしまな「裁き、弁護する」者たちと異なって、部分的・一時的に見たり聞いたりするところでは判断されません。主は忍耐をもって、外見・外聞のぶざまな人間あるいは罪人の頭^{かしら}なる人間が悔い改め、ご自身の懐に帰って来るのを待っておられます。

今日の説教のまとめとして、ローマの信徒への手紙 15:7-13 の使信と内容を捉えましょう。

ローマの信徒への手紙 15:7——

だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。

ここで、パウロは、神の掟^{おきて}…キリスト教倫理の第一の教え…「互いに愛し合いなさい」（ローマ13:8、Iヨハネ3:11、4:7,11,12）を「互いに相手を受け入れなさい」を言い換えています。パウロはユダヤ人と異邦人の和解を念頭に置きながら、「互いに」という点を強調しています。

先週は、イザヤ書2:5の勧め、「ヤコブの家よ、さあ来たれ、主の光の中を、私たち一緒に歩もう」（直訳）を読みました。「さあ来たれ、私たち一緒に歩もう」の部分は、英訳では‘**come and let us walk**’となっています。これを大変力強い勧めであると同時に、私たちがなかなか一緒に・一つになれない現実に向き合わせられます。

「互いに」という一語に存する困難さを見据えつつ、ヨハネは「神がまずわたしたちを愛してくださったから」（Iヨハネ4:19）と語り、またパウロは「キリストがあなたがたを受け入れてくださったように」（ローマ15:7）と述べています。闇がはびこるこの世の中で（だからこそ）、私たち一緒に、主の光、十字架の愛、復活の希望を掲げて、歩んで行こうと、呼びかけています。

この説教の冒頭で、旧約から新約へと、「エッセイの根・株」テキストが受け渡され、そこにさらなる深化が見られる、と述べました。

ローマの信徒への手紙 15:12——

また、イザヤはこう言っています。

「エッサイの根から芽が現れ、
異邦人を治めるために立ち上がる。
異邦人は彼に望みをかける。」

導入句に「また、イザヤはこう言っています」とありますが、実際には、イザヤ書 11:1 と:10 の預言が、聖霊の導きのままに豊かにされ引用されています。

主イエス・キリストにおいて成就した言葉として、ローマの信徒への手紙 15:12 を読み補うならば、以下ようになります——「主イエス・キリストはユダヤ人も異邦人も、すべての人を救い出すために、罪に引かれた生活を治め、**よみがえる**」。

確かに、イザヤ書 11:10 には、「エッサイの根が（旗印として）**立つ・立ち上がる**」と書いてありました。しかし、ローマの信徒への手紙では「**立ち上がる**」ことは、まさに「**よみがえる・復活する**」ことであるという福音的な理解が示されました（「**立ち上がる・よみがえる**」ギリシャ語でアニステーミ。強調形の動詞で「上に+立たせる」が原意。マルコ 8:31、ルカ 24:7、ヨハネ 20:9、I テサロニケ 4:16 他）。

メシアは、人々を救うために「立ち上がる」、それは言い換えれば、人々の罪を背負って十字架につけられ、そして、「**よみがえる**」ということです。「**立ち上がる**」という宣言は、主イエス・キリストの十字架と復活による救いという福音につながっています。

そして、人間の側からの大切な応答として「異邦人は彼に望みをかける」ということが昭示されました。

キリスト者の生き方、神の救いに基づく生き方と特徴として、**将来から現在の私たちの生き方が決まってくる**、ということがあります。それはちょうど、**光の祭り・クリスマスから、それを待望するアドヴェントの闇の中での歩み方が決まってくる**のと同じです。待降節にさなか、せわしなく、いろいろな問題を抱え、悩み暗くなっていたとしても、星の輝き、御子の笑み、光あふれる飼葉桶のもとでの喜びが確かであるからこそ、私たちは「**さあ来たれ、私たち一緒に歩もう**」と呼びかけ合うことができます。

このように、将来、どういうことが起こるか、というところから始まって、今の私の生き方が決まってくるのが、キリスト者の信仰生活です。その肝心要が、^{かんじんかなめ}「キリストに望みをかける」ということです。

ローマの信徒への手紙 15:13——

希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。

主イエス・キリストの十字架と復活が土台となって、私たちの内に希望が満ちあふれるように、とのパウロの祝福であり祈りです。

私たちの神への^{そむ}背きや自己中心を省みるならば、神のまことの希望を受け入れること、受け止め続けることができません。私たちは、キリストが再びやって来られること、主の裁きを受けたうえで天の国に入れられることを、私たちの信仰生活の中心に置くことは容易ではありません。人は少なからず、自分の過去にこだわったり、今日明日の思い煩いにかかずらったりしています。

そのような人間の本性を見抜き、それを主にあって克服したパウロは締め括りに、「聖霊の力（デュナミス：「爆発的な力の業」ダイナマイトの語源）によって」と、核心をついています。十全な力が私たちを助けます。自分の希望を打ち破る、それをはるかに超える神の源とする希望が「聖霊の力によって」、私たちに与えられます。

すでに希望の土台は、主イエス・キリストの十字架と復活によって据えられています。そのことを、今のみならず将来にわたる私たちの希望として歩んで行きましょう。まことに深い「エッサイの根・株」の使信——地に埋^{うづ}もれかけた株から芽が出て、若枝として成長してゆく——の込められた讚美歌96番をご一緒に歌いましょう。